

「うう——」

感動と、官能の極致に、呻きがこぼれる。

「んうう、いっぱい……」

波菜子が身をくねらせ、両脚で永流の腰を抱き寄せた。それにより、ふたりの恥蕚が絡み合う。

（ああ、挿入^{はい}ってる）

締めつける内部が、細やかに蠢^{うごめ}く。敏感な頭部に、筋張った棹^{さお}に、ヌメつく柔褰^{さか}が戯^{たむ}れかかる。

（これがセックスなんだ——）

密着する女体の弾力も心地よい。たまらず、今度は自分から唇を重ねた。

しっかりと抱き合ってくちづけを交わし、腰だけを不器用にヒコヒコと動かす。出入りするものは絶え間なく締めつけられ、感じるところを満遍なくこすられる。

（気持ちいい）

体の下で乳房がはずむ。彼女が「あん、あん」と間断なく声をあげるのを聞いていると、別の世界に連れていかれそうな心地がする。

「永クンのオチンメン、すっごく硬い……あん、もつといっぱい突いて」

淫らな要請に従い、ピストンの動きを速める。

「あう、あつ、はん、気持ちいい」

呼吸がはずみ、吐息が顔に吹きかけられる。熱っぽさを増したそれを吸いこみながら、桃源郷に漂う。

（これで本物の男になれたんだ）

無事体験できたという誇らしさに加え、極上の快さ。美しく奔放な従姉がいてくれたことに、感謝せずにはいられない。

肉茎にまわりついていたヌルミが、外にも溢れだした気配。動かしているところから、ピチャにちゃと卑猥な濡れ音がこぼれる。

（ああ、本当に——女のアソコに挿れてるんだ）

実感がさらに深いものとなる。

夢中になって腰を突き動かすうちに、永流はたちまち性感の高みへと上昇した。

「従姉さん、おれ——」

早く達するのを情けないと思いつつ、蕩けるような射精欲求には勝てなかった。

「もう？」

一瞬不服そうな顔を見せた波菜子も、すぐに表情を和らげ、



「ま、初めてだから仕方ないか」

背中を優しく撫で、放出を許してくれた。

「なかに出していいからね」

嬉しい言葉。最初から心置きなく、膣内に射精することができるなんて。そう思ったら、急せいたように快感がこみあげた。

高まる衝動に従い、永流は闇雲に女芯を突いた。ときどき抜けそうになるのも、うまく波菜子がリードしてくれる。

「あん、はううッ、ン、はん、あふう」

高まる喘ぎ。こぼれる濡れ音はますます大きくなる。それに合わせ、肉壁が吸盤のように吸いつく。ぶつかり合う鼠蹊部そけいぶもベトベトだ。

「あつ、あ、すごい。ん、ふううう」

波菜子のよがりも艶めきを増す。

「あう、いくよ。従姉さん——」

腰が気怠けだるい。全身が甘美なわななきに包まれる。息が荒ぶる。豊満な女体を抱きしめて、永流は膣奥にありつたけの牡液をほとばしらせた。

「ん、うああ」